

## 311 を境に考えていること 0512

土木インフラの役割は、

- 1) それぞれの土地に根ざした人々の暮らし、すなわち日常を支えること、
  - 2) まれに起こる自然の猛威から人々の命を守ること、
- の二つだろう。

そして、インフラを設計する際の外力算定は、まれに起こる自然の猛威を想定し、そこから完全に解放されることを目指して、それに耐えるものをひたすら作ってきた。

20 世紀は常にそうした考えのもとに土木インフラの整備を行ってきた。しかし、311 を境に、そのような安全神話には疑問が投げかけられ、自然の猛威と折り合いをつける新しい土木工学のあり方が模索されるようになりつつある。

つまり、命は守りつつ、ある程度の損害は覚悟するという対応のあり方だ。となると、ある程度の損害とは何か、また、折り合いをつける際に大事にすべきことは何だろうか？ということが論点として浮かび上がってくる。

すると、この時点で「それぞれの土地に根ざした人々の暮らし」すなわち日常のなかで大事にしていることは何かという問いも浮かび上がってくる。

存在している時は気が付かないが、失うとひどく寂しいものといえば、人と人のつながりや、何気ない風景のありがたさ、など心の拠り所となるものがまずあげられると思う。

人と人のつながりは命を守ることができれば、何とかなりそうである。何気ない風景は、なぜそこが好きだったかを記憶（あるいは記録）に残しておけば、そして、人と人のつながりさえ残っていれば、失っても作り直せる気がする。

そう考えると、「作り直せる仕組み」が整備されていれば、まれに起こる自然の猛威から人々の命を守ること、それだけを目指し、ハードとソフトを組み合わせて整備すれば良い、というシンプルなものが出てくる。

自然の猛威と折り合いをつける新しい土木工学のあり方のポイントは避難ということかもしれない。そして、ハードを作るときも、壊れる兆候がわかりやすいなど、避難の合図としてのあり方が検討されてしかるべきだと思う。避難経路と避難場所の確保、避難道具の確保、避難のタイミングの研究、.. やることがいっぱいあるな。

高齢社会における避難では車の活用は避けられない。すると、渋滞がもっとも恐ろしい事象になるので、そうならない道路整備やマネジメントのあり方も大事だ。

安心して避難できるためには、やはり、「作り直せる仕組み」の整備が不可欠だ。その安心感がないために避難のタイミングを逃すからだ。では「作り直せる仕組み」とは何か？

これがまた難しい。保険などの概念を勉強しないといけないし、そもそも今回のような事象に保険が有効とも思えない。多分、日頃からコミュニティーを育てて、万が一の時の復興方法を、定期的に話し合っておくこと、そんなところに落ち着く気がする。

そう考えると、今までとは違った対話の技術がとても求められる世の中になっていくと予想され、ファシリテーターのような人と人を接着させるような役割の重みが増え、上昇するだろう。

モノは作り直しがきくが、コミュニティーの形成は時間がかかるし手間暇もかかる。ましてや作り直しとなると、ビジョンの共有からして困難が想定される。

コンサルタントの仕事か否かはともかくとして、土木インフラの役割の一つである、それぞれの土地に根ざした人々の暮らし、すなわち日常を支えるためには、コミュニティーの形成とその組織化、対話の活性化という作業はどうしても避けられないものだ。

ここをしっかりとしないと、絵に描いた餅になるしかない運命が待っていると思う。

これは時間がかかるし、かけないといけない部分だ。

しかし、時間がたてばたつほど、人心は疲れ、離ればなれになる。時間はかけなければならないので、とれる策は、疲れを癒し、離ればなれにならないような対話の仕方を工夫することだろう。つまり、コミュニケーションの取り方に注意を払うことにもっと神経を集中せねばならない。苦しいときに我慢するためには、「ここがまんすればご褒美がもらえる」という希望のあるなしがとても重要だ。

では、希望とは何か。「それが実現したら楽しそうだというイメージ」だと思う。すなわち、まちづくりの青写真に他ならない。

これを、それぞれの土地に根ざした人々と一緒につくりあげるのだ。これなら、コンサルタントの職能を生かせる。100年後はこんなイメージになる。その中間の50年ではこう。そして、そこに到達するスタートはこう。3年後はこう。... 必要な資金はこうやって調達する。ここは税金、ここは民間資金、ここは外国ファンドでもOK。

とても多くの職能がかかわる事業であることは自明である。土木だけでやろうなんて思っただめだ。土木は統合者として振る舞う位置にいる。

そんな企画を立てたらよいのではないかと思う。

## 蛇足

個人的には、水際のデザインがとても重要だと思う。ここは自然に逆らわず作り込まない、日常にふれあえるしつらえがふさわしい。ある程度頻繁に起こる災害への備えはそこから少し引いたところで対応したい。それも土木だけでやるのではなく、建築、造園もあわせて、合わせ技でやる。

避難経路は海から山に向かってつながる公園を作るのはどうか？ 普段は木々に囲まれた広場だが、災害時には道路となるようなモノである。直線である必要はないし、ところどころ切れていて当然良い。川筋も良いかも知れない。要はそれぞれの土地に根ざした人々が、普段は憩いの場として使いながらも非常時には避難経路として使うという認識が定着していればよいのである。

首都圏だって、公園をつないで、徒歩帰宅経路を公園として整備したら、どんなに素晴らしいだろうか。等と夢想する。昔の構想を今こそ実現すべきか？ 出来るかどうかではなく、やらねばならぬのだろう。次世代のために。